

---

---

---

---

---

# 「使える英語」を目指した県英語研究会の活動

福井県英語研究会副会長

西 健

令和5年3月4日付けの日本経済新聞に本研究会の記事が掲載されました。「福井60年の英語教育実る」というタイトルで、本県における学生の英語力が群を抜く理由として、本研究会の活動がその一つだと書かれています。以下に抜粋いたします。

『福井県独自の英語教育の歴史は長い。県内の中学・高校のほぼ全ての英語教員が加入する自主組織「福井県英語研究会」が生まれたのは半世紀以上前の1959年。掲げた目標は「英文和訳偏重の打破」だ。文法や英単語暗記を主軸にした当時の英語教育から、「使える英語」を習得させることにシフトした。』

11月9日に武生東高校で行われた「福井県英語教育研究大会」の公開授業は「使える英語」を習得させるための活動であり、学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」の視点からの提案授業でした。

本県ではこれまで、「英語によるコミュニケーション活動を通して、自分の意見や考えを英語で伝え合い深め合う授業」を実践してきました。今後も、自分の授業を見つめ直す、他の英語教員の授業を参観する、研究会に参加する、授業づくりについて議論する、様々な文献等から理論を学ぶ等の研鑽を通して、よりよい授業づくりに取り組んでいきたいものです。

さて、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが5類感染症になったことを受けて、授業や諸活動等がコロナ禍前の学校生活に戻ってきました。本研究会においても、当初予定していた活動を行うことができました。6月13日の総会・講演会を皮切りに、英語放送テストやリーディングテスト、Bridgingの作成・発行、英語ディベートに係る活動、中学校英語セミナー、中・高の英語弁論大会、高校英作文コンテスト、会員名簿、会報等、数多くの活動を行っていただきました。先生方の献身的なご協力のおかげです。ありがとうございました。

私が参加した活動の中で、中学校英語弁論大会の様子を書かせていただきます。41名の生徒が参加し、自分自身、友達、社会問題、世界に関わる問題等、多岐にわたるテーマについて、自分のメッセージを伝えていました。聞き手も話し手のメッセージを受け止め、自分なりに考えを構築していたようです。昨年度のように2部に分けて行いましたが、それぞれの部が終わった後に、参加者が小グループになってお互いの弁論について振り返ったり交流したりする時間を設けました。感染症の制限がなくなったことで、こうした交流ができたことがとてもよかったと感じました。弁論委員による新しい試みでした。

県英研で行われている活動は、本県の子どもたちの「使える英語力」に直結したものであり、他県にはない活動です。県英研に関わる先生方におかれましては、会議の開始時間を早く設定する、メールやオンラインを活用して会議を行う等の工夫をする中で、今後も無理のない活動を目指していただきたいと考えています。

最後になりますが、今後とも本英語研究会への格別のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

---

---

---

---

---

# 全英連大会に参加して

福井県英語研究会副会長

磯野和之

令和5年度はアフターコロナという中で、学校ではほとんどの活動がコロナ禍前の状況同様に実施されたと認識をしています。英語研究会においても、委員会活動や各種コンテスト等がほぼ以前の形で実施できたということは、嬉しい限りであり、関係先生方には心より感謝申し上げます。

そのような中、11月に開催された全国英語教育研究大会（愛媛大会）に私自身が二日間参加させていただく機会を得ました。3年ぶりの対面での大会実施ということもあり、ノウハウが途切れた中、愛媛県で運営に携われた先生方に関しては、幾重もの困難があったであろうことは想像に難くありません。このような状況下で開催された大会は素晴らしいものでした。記念講演に始まり、授業実演（小・中・高の授業実演に関しては生徒の安全を優先し、映像発表の形式）、分科会など、コロナ禍以前の形式を踏襲しながらの充実した内容であり、徐々に英語教育についてだけ考えを巡らせることができた二日間でした。

中学校の授業実演では、New Horizon 3 ‘A Mother’s Lullaby’の最終時間の授業発表を拝見しました。授業を担当された先生はオールイングリッシュの授業にも精通しており、生徒の意見交換の場面が多数盛り込まれ、interactionの中で思考力や表現力を駆使しながら深い学びを目指す授業でした。この授業について興味深い点は多々ありましたが、私が最も感銘を受けたのは、メッセージ性に加え豊かさにあふれた生徒たちの表現といえます。教師からの発問は決して簡単なものではなく”Do you think Japan is a peaceful country?” “Today what did you learn about wars and peace?”など深い思考を要するものでしたが、生徒たちは、誰一人としてひるむことなく、語彙・文法など多様な表現を見事に駆使し、楽しみながら自分の思い・考えを英語で自己表現し伝える姿がそこにはありました。中学校3年生とはいえ、表現力や思考レベルは高校生に匹敵するものを感じた授業です。授業実践でのレベルまで生徒が深く考え、また伝えるための表現をしっかりと intake するためにはどれほど多くの英文が input され、また、どれほどの時間を input に要したのか、さらには、思考する機会や表現をする場面を日常の授業の中でいかに準備してきたのか、等いろいろ考えさせられることがありました。

そんな中、文教大学教授 金森 強先生の記念講演を拝聴しながら、福井県の英語教育の課題についても考えるきっかけとなりました。金森先生は元々愛媛大学で教鞭を執られ、長年にわたり英語教育指導法を担当されてきた権威であります。多くの英語教員を育ててこられた先生の、理論と実践から構成された講演からは、福井県においては残念ながら未だ大きく舵を切れていないのではないかと危惧される部分が見て取れたのです。それは、小・中の英語教育連携に他なりません。明らかに金森先生は小・中での連携を意識されており、中学校の先生方が認識しているべき小学校の授業の実態と目標設定の方法・具体的な授業実践等を、英語教師を目

---

---

---

---

---

指す学生に対しても日常レベルで指導をされてきたことがよくわかりました。また、小学校と中学校での英語教育現場の tips を言語・思考・認知・活動・評価など多数の視点から提示されており、小学校・中学校の多くの先生方に対して有益な示唆を与えてくれるものでした。このような環境から巣立っていった英語教員が愛媛県には多数いるのだとわかり、驚く一方で、福井県の現状をまったく把握しきれていない自分自身に対して忸怩たる思いでした。福井県の中学校・高校の英語教育の連携は英語研究会の先生方のご尽力のおかげでどの県にも引けを取らないと長年考えてきました。しかしながら、この英語研究会には小学校の先生方は大きく関わることがありません。新学習指導要領が導入され小学校で英語が教科となって4年が経ちましたが、何らかの手段を講じていかなければならない時期が来ていると思われまます。小・中・高での連携など無理、と最初から諦めるのではなく、取りかかりを考えてみませんか。会員の皆さまの柔軟な議論とご意見があつてこそ、この問題にも取り組むことが可能になると確信しています。小学校で英語を学んだ生徒たちが中学校へ入学し、次は高校へと入学をしていくという事実を忘れるべきではないと思います。

最後になりますが、今後とも本英語研究会活動へのご支援とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。